

令和4年10月24日

令和4年度

第1回大田区総合教育会議会議録

大田区役所 総務部総務課

(午後 4 時00分開会)

○区長

ただいまより、令和4年度第1回大田区総合教育会議を開会させていただきます。

本日、皆様には、この総合教育会議を招集申し上げましたところ、お忙しい中にもかかわらずご参集を賜り、厚く御礼を申し上げます。

本日の会議につきましては、会議録作成のため録音をさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、事務局から傍聴について報告があります。よろしくお願いいたします。

○総務課長

事務局を務めさせていただきます、総務課長の梅崎でございます。よろしくお願いいたします。本日は傍聴希望者が3名いらっしゃいます。

○区長

ありがとうございました。

大田区総合教育会議傍聴要領に基づきまして、本日の傍聴希望者に対しましては許可したいと考えますが、よろしいでしょうか。

(「はい」との声あり)

○区長

ありがとうございます。また、途中からの入場についても許可したいと考えておりますが、これもよろしいですか。

(「はい」との声あり)

○区長

ありがとうございます。それでは、傍聴を許可することといたします。

(傍聴者入場)

○区長

それでは、恐縮ですが、傍聴される方に申し上げます。議場における言論に対して批評を加え、または拍手その他の方法により公然と可否を表明することを禁止いたします。

ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

それでは、これより会議を始めます。

まず、初めに、大田区総合教育会議運営要綱第8条2項におきまして、議事録署名者は、私のほかに委員の中から会議において決定したものが署名しなければならないとされております。本日の会議の議事録署名者は、小黒教育長にお願いいたしたいと思っておりますが、よろしいですか。

(「はい」との声あり)

○区長

それでは、小黒教育長を会議録署名者といたしますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、早速ですが、本日の議題について、事務局から報告を願ひます。

○総務課長

それでは、お手元の次第をご覧いただきたいと思ひます。

次第の2番、本日、区と教育委員会の調整事項といたしまして議題とするものは、子どもたちの新しい学びの推進と地域力を活かした学校づくりでございます。

○区長

それでは、議事を進行いたしたいと思ひます。

総合教育会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づき、地方公共団体の長が設けるものとされている会議で、平成27年から開催をしております。

会議では、私と教育委員会の皆様とが、教育の条件整備など、重点的に講ずべき施策や児童・生徒等の生命・身体の保護等、緊急の場合に講ずべき措置についての協議・調整を行うことを目的としております。

区と教育委員会の連携を深め、より一層民意を反映した教育行政の推進を図ってまいりたいと思ひます。

本日の調整事項は、子どもたちの新しい学びの推進と地域力を活かした学校づくりでございます。

教育委員の皆様と幅広く意見交換をさせていただきたいと思ひます。

忌憚のないご意見を賜りたいというふうに思ひますので、よろしくお願ひをいたします。

それでは、お手元に配付しております資料について、それぞれ担当の課長より説明をお願ひいたします。資料1については細田指導企画担当課長、資料2につきましては山本教育地域力担当副参事から説明をお願ひいたします。

それでは、よろしくお願ひいたします。

○指導企画担当課長

私からは、ICTを活用した「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善について、ご説明させていただきます。資料1をご覧ください。

まず、ICT教育の現状についてご説明いたします。

資料の左半分、中段にある左側のボックスをご覧ください。

新型コロナウイルス感染症の拡大により、GIGAスクール構想が前倒しとなり、令和2年度末には区立小学校全児童、令和3年度5月には区立中学全生徒への端末貸与が完了し、一人1台の端末環境が整備されました。

その下にお示したように、令和3年度までにICT教育推進専門員やICT教育支援員を配置し、学校のICT活用推進に向けた指導、助言や操作支援、研修の実施などを行うなど、人的サポートをしてまいりました。

また、これまで紙ベースで実施していた「算数・数学ステップ学習」や「多層指導モデルMIM」などを電子版に移行し、より活用しやすい状況をつくりました。

右横、令和4年度のボックスをご覧ください。

今年度は学級集団調査の電子版であるWEB-QUを移行し、結果の即時フィードバックを可能にしました。ICT教育推進専門員が作成した「ICT教育通信」、「情報モラル教育通信」を全校に配信、ICT教育先進校として4校指定、保護者向け情報モラル研修に加え、希望校には児童・生徒向けの講習会を実施することを可能にし、教員間の実践事例共有サイトである「おおたICT教育センター」の公開、教育委員会が作成する社会科副読本電子化などを進めてきました。

このような取組の結果、上段の大田区におけるICT教育の段階にあるように、①アナログでできたことをデジタルで代用する段階はもちろんのこと、②デジタルの特性を活かして学習効果を増大させる段階までは達成できていると認識しております。

今後の方向性ですが、資料右半分をご覧ください。

個別最適な学びや協働的な学びを、全ての区立学校で実現させるために、③授業デザインが変容し、新たな学びへの実践への段階に進めることが重要となります。既に学校によって、もしくは教員によっては、この段階に到達できているケースも見られております。

全ての区立学校において、この段階を達成させるためには、下の(1)、(2)に上げたように、学校教育の質の向上に向けたICTの活用及びICTの活用に向けた教師の資質・能力の向上を図っていく必要があります。詳しくは後ほどご覧ください。

これらのことを踏まえ、現在の大田区教育ICT化推進計画は、令和4年度までの計画となっているため、令和5年度からの新たな「新大田区教育ICT化推進計画」の策定に向けて検討を進めてまいります。その際には、同じく令和6年度からスタートする「新おおた教育ビジョン」が目指す教育施策の方向性をしっかりと受け止め、その実現に向けた計画となるようにいたします。

具体的には、その下にお示しした具体的な検討事項にあるように、学習者用デジタル教科書の導入、学力調査等のCBT化などについて検討してまいります。

最後になりますが、一番下のボックスには、先日視察をしていただきました小池小学校の実践事例を参考までに載せてございますので、視察での様子に加え、ご一読いただきますようお願い申し上げます。

○区長

ありがとうございました。

引き続き資料2を、山本教育地域力担当副参事、お願いします。

○教育地域力担当副参事

私からは、地域力を活かした学校づくりとしてのコミュニティ・スクールの推進について、資料2により説明をさせていただきます。

区内では、令和3年度のモデル校5校での実施を踏まえ、本年度はその5校が引き続き実践校として活動しております。教育委員会としては、令和7年度までに約50%を目指し、令和8年度には全校設置を目指し、今後調整を図ってまいります。

コミュニティ・スクールの推進のテーマとして国や自治体では、例えば、地域とともにある学校づくりを目指してとか、地域とともに歩む学校とか、地域の中核を担う若者を育てるとか、地域全体で未来を担う子どもたちの成長を支えるなど、個々の自治体、学校で、様々なベクトルを示す言葉で推進を図っております。

お手元の資料2の1ページ目でございます。本区におけるコミュニティ・スクールのイメージをまとめ、2ページ目では、先般、実地見学をしていただきました道塚小学校の事例とそのほかに、大森第二中学校、大森第三中学校の事例を紹介しております。

2ページ目の写真の部分は、令和3年度の取り組みとなっております。

なお、大森第二中学校は、令和3、4年度大田区教育研究推進校として、コミュニティ・スクールの実践を通じて、学校・家庭・地域の連携と実践共同体を研究主題とした研究活動に取り組んでおります。今年度、1月下旬には、研究発表会も予定されているところでございます。

実践校5校の取り組みを踏まえた、これからの大田区での取組を考えていくと、資料1ページ目の左上にまとめておりますように、地域の皆様の協力をいただきながらつくり上げていくものです。2点目としては、PTAや部活動補助人材と地域、学校とで協働の関係が強固になります。

3点目では、災害時のボランティア人材の育成や日頃からの関係づくりができるという言葉でまとめ、また、コミュニティ・スクールの拡充していくことで、学校を中心としたコミュニティの形成、地域力の更なる向上につながるとうたっております。

災害時対応や子どもたちの安全見守り活動、地域文化伝承など、学校と地域の連携により、双方にメリットが生まれる仕組みとも言えます。

特に、地域にとっては、将来地域を支えてくれる子どもたちは地域の宝であり、連携・協働・交流のための仕組みにより、時間をかけて育まれると考えます。

資料1面の右上には、実践校での成果と課題をまとめております。コミュニティ・スクールは、区内18の特別出張所の取組を、18色のまちづくりと表現したように、90校の学校がそれぞれの特色を有し、運営されていることから90色の色合いがあると思います。成果と課題も、それぞれであると思いますが、代表的なものとしてご覧ください。

実践校での成果では、学校や地域で起きた変化として、学校の敷居が低くなり、学校への気軽な声かけの機会が増えたということで、確実に交流の機会が増え、相互理解が進んだとしております。

また、地域人材が広がったとしており、職場体験や、授業での登壇、地域の歴史文化学習、地域の産業の学習、キャリア教育など、学校での授業にもプラス効果が上がっているものがあるとしています。

一方、課題としては、学校運営に携わることで、地域にとってのメリットをどのように感じていただくか、これは、個々の地域の捉え方、運営協議会委員の個々の捉え方などにもより、少し時間をかけて培っていく課題と考えます。

2点目では、教員が地域との連携意識を持つこととあります。地域の方々の情報、キャリアは、教員の言葉をフォローしながら子どもたちに染み入りうるものと考えます。非常に大事な要素だと考えます。

3点目では、様々な人財活用のための時間不足とあります。地域との連携・協働が軌道

に乗るまでは、非常に手間のかかる作業です。しかし、この部分を乗り越えると教員にもゆとりが生まれ、地域の皆様との交流は、自分だけで抱え込まずに課題解決の道が開けると考えます。

4点目では、学校評価への関与の難しさとあります。この部分は、時間を要する課題だと考えます。学校現場以外の方々からでき得る評価の部分を担っていただくなど、今後の研究が必要な課題と考えます。

資料1面の下の方、左側は文部科学省の仕組み図です。右側は、大田区における学校と地域の教育を通じた関係図を表現しております。

災害時対応、子育ての課題解決、施設開放、放課後の居場所づくり、地域文化伝承、部活指導、キャリア教育、子どもの安全見守りなど様々な分野が、コミュニティ・スクールの仕組みに収れんすることで、多くの地域課題、教育課題が解決され、地域の持続可能な社会の実現につながるものとイメージしております。

○区長

ありがとうございました。

それでは、今の1番、2番の報告に基づきまして、それぞれの委員の方から意見を述べていただきたいと思っております。それでは、大変恐縮ですが、私から指名をさせていただき順序をお願いいたします。

まず、三留教育長職務代理者から、ご意見をお願いいたします。

○三留教育長職務代理者

今、説明があったICTを活用した学び、それからコミュニティ・スクールの取組の推進について、私の考えを述べさせていただきます。

一人1台のタブレット型パソコンの導入については、国のGIGAスクール構想によって、全国一律に急に始まったという印象がございますけれども、大田区ではこれまで他地区に先駆けてパソコンの導入について予算化をして、令和2年に策定された大田区ICT化推進計画の下に着実に進めてきたという印象を私は持っております。

実施当初は各学校で戸惑い等もあったようですが、大田区の場合、ICT支援員の配置などもなされていて、比較的スムーズに授業におけるパソコンの活用が進んだのではないかと考えております。

19日の小池小学校の視察にご一緒させていただきましたけれども、児童の多様な取組をご覧いただけたのではないかと考えております。

パソコンの学習を始めた頃はドリル学習や調べ学習が多かったですけれども、今はご覧いただいたように、表現や発表、思考の道具として各校で様々な取組が進んでいるところでございます。

ただ、取組の内容、方法が各学校で違うこともあって、各校の優れた実践を共有化すべきという意見が教育委員会の議論でなされたところです。

この考え方に沿って、資料にある「おおたICT教育センター」をつくって、優れた実践を共有していくということで、その取組に期待しているところでございます。

また、学習者用のデジタル教科書の使用が始まりました。小池小学校でも使われており

ますが、デジタル教科書には、拡大、縮小、音声読み上げ、動画提供、書き込み、保存などの様々な機能があります。資料の新大田区教育 I C T 化推進計画にも実践例がございますが、今後は学習者用デジタル教科書の効果的な活用に期待しているところです。

新型コロナ感染症の影響もあり、児童・生徒が登校できないときのオンライン授業も進んでおります。児童・生徒の学習の機会の保障という意味でも大切な取組と思っております。

次に、大田区のコミュニティ・スクールについては、説明にあったように令和2年に調査研究を実施し、昨年度モデル校の実施を経て、本年度小学校3校、中学校2校の実施となっております。

こうしたしっかりとした過程を踏んだということで、大田区型の特色あるコミュニティ・スクールが始まってきていると感じております。

今年の2月末に区のモデル校事業実施報告会をオンラインで実施をいたしました。各校の実施報告では、例えば単なる話合いではなく、熟議がなされるようになった、学校の課題に関するテーマについて議論が進んでいるなど、委員の当事者意識の高まりと、学校運営協議会が学校教育の充実、活性化に寄与しているということがうかがわれました。

この報告会で、多くの学校が成果として上げていたのが、学校支援地域本部との連携でした。

学校支援地域本部が地域人材を発掘し、学校の教育活動の充実に結びつけているということです。

今日の頂いた資料の2枚目に、様々な各校の取組があります。これらの実践例の多くは学校支援地域本部の皆様が関わったものではないかと思えます。学校支援地域本部の皆様、地域の皆様が学校を支援してくださっているということを感じているところでございます。

1枚目の資料の実践校の成果の③に、地域人材の人脈が広がった、地域の様々な方が紹介してくれているとありますが、このことに関しても、学校支援地域本部の働きが大きいと思っております。

道塚小学校では、地域の人材を起用した授業をご覧いただきましたが、優れた人材を起用するには、学校の努力もあるとは思いますが、日頃の地域の皆様の学校に対する支援があればこそだと思っております。

大田区では、地域に根差した教育活動を以前から進めてきており、成果を上げてきています。学校支援地域本部は大田区のすばらしい地域性に合っており、どの学校でも活動が活発に行われております。

今後、国の方向に沿い、名称は地域学校協働本部に変わるようですが、これまでの学校支援地域本部の活動を基に、一層地域との連携、協働を進めてほしいと思っております。

○区長

ありがとうございました。

それでは、引き続き、弘瀬委員お願いいたします。

○弘瀬委員

指導課からの説明がありましたように、G I G A スクール構想というのは教育現場の I

C T活用のために、児童・生徒に一人1 端末ということで導入が始まり、文部科学省で2023 年の実現を目指していましたが、この新型コロナウイルス感染症拡大により、2021 年より前倒しで始まっています。

また、ソサエティ 5.0 時代を生きる児童・生徒に対し、誰一人取り残されることのない創造性を育むことが求められています。I C T教育は、次世代を生き抜くための人材育成のために大変重要だと考えております。

現在のように、情報化社会において、I C T機器を使う機会は大変多くなってきております。児童・生徒が将来にわたってI C Tを快適に、かつ効果的に活用するためには、現在の教育現場で適切な使い方、並びに健康面についての指導を行うことが重要であると考えております。

ぜひ、家庭でも使用方法について、十分な管理の下にI C T機器を正しく使えるように、健康リテラシーを十分考えながら利用していただくことが望まれるため、ご指導をお願いしたいと思っております。

I C T教育が浸透していくことによって、先生たちが授業のために作成した教材を他の先生方と共有し、それを加工、再利用することで、業務効率を高めることができると思います。紙の教材では表現が難しかったものがデジタルデバイスだからこそ表現でき、動きや音、動画やアニメーションを使った教材づくりも可能になっております。

デジタル化された教材、デジタル端末とインターネットがあればいつでもデータを引き出し、復習することが可能になり、さらにI C T教育ではデジタルデバイスを通じて、生徒の個々の学習の進捗状況に合わせて、適切な教材を、適切なタイミングで提供することもできると思っております。

ここで少し、学習環境面でのことについてもお話しさせていただきたいと思えます。

児童・生徒が利用している教室が必ずしもI C T機器の利用に適した環境でないことが挙げられます。具体的には、窓からの光、照明が児童・生徒の使うパソコンの画面に映り込むことがあり、パソコンを置くスペースも今の教室に設置されている机では十分とは言えません。児童・生徒に合わせて机の高さを変える必要なども指摘されておりますが、それができておりません。

また、電子黒板も、座席の位置によって見えづらいために、自分で場所を移動しなくてはならないなどの不便もあります。

このようにG I G Aスクール構想とI C T教育を推進していく中で、学校の教室環境やI C T機器の設置について、学校保健の中でしっかりと対処していかなければならないと考えております。

児童・生徒の姿勢の悪さへの影響が指摘されています。また、日本眼科医会では、新型コロナウイルス感染症感染拡大の前から近視が世界的に増加していることに危機感を抱いております。

そのような中、新型コロナウイルス感染症の流行拡大によりまして、自粛生活で屋外活動の減少、スクリーンタイムの増加、I C T機器の活用などにより、近視人口はこれまで以上に増加してきております。

また、タブレット、P Cや電子黒板を集中して見続けますと、まばたきの回数が減り、涙が目の表面を十分に覆うことができなくなり、ドライアイになることも指摘されてお

ます。

そして、睡眠前に強い光を浴びますと、入眠作用があるホルモンのメラトニンの分泌が阻害され、寝つきが悪くなる可能性もあります。

このような問題の解決のためには、屋外活動の時間の確保やスクリーンタイムの制限、スマートフォンの使用制限、さらに目の健康に努めていく必要があると考えております。

それだけではなく、イヤホンを使用する児童・生徒が増えてきております。イヤホンの問題は、イヤホンを長時間装着するために外耳道の表皮の剥離が起こったり、外耳道が高湿多湿になって、細菌が繁殖しやすくなり細菌感染を起こしたりすることもあると言われております。

さらに、内耳のトラブルとして、イヤホン難聴と呼ばれる音響の外傷も起こってくると言われております。

これらのことを考えて、先を見据え、今からやらなくてはいけない健康管理について、学校医も含め、各学校で教育を進めていただきたいと思いますと考えています。

さらに、ソサエティ 5.0 時代を生き抜くためには、やはり文章や情報を的確に読み解き、対話する科学的な思考だとか、吟味した活用が必要になってきます。

価値を見つけ出す感性と力、好奇心、探求心が重要であると言われております。先日の道塚小学校での企業と連携して実践された授業を見学させていただき、令和 8 年度までの目標で全校に設置するというお話でしたが、非常に期待しているところであります。

○区長

ありがとうございました。

それでは、高橋委員お願いいたします。

○高橋委員

子どもたちの新しい学びの推進について、小池小学校の ICT 教育の授業を参観させていただきました。それについて、感想を述べさせていただきます。

6 年生の外国語の授業では、デジタル教科書を使った授業があり、タブレットから様々なページを写し出し、発音などを確認していました。外国人の外国語教育指導員の活用も併せて、より学習効果が得られると考えます。

5 年生は、工業について調べ学習をし、地図上に工業地帯をまとめていました。タブレットを使って、グループごとに対話しながら地図を完成させるようでしたが、授業中一人でタブレット学習をするのではなく、友達とコミュニケーションを取りながら授業を進めるのは良いと思います。

低学年では、意見、感想などを手書き入力していましたが、1 年生は始めたばかりなので、次に進めず戸惑っている児童も何人かいたようです。タブレットの操作は、はじめの一步が大切だと考えます。先生が目配り、気配りが必要になってきます。情報教育の年間計画を基本操作、学びポケット、情報モラルと分け、低学年、中学年、高学年別に設定しており、また年度の初めには繰り返し確認をして定着させることとなっており、子どもたち全てが落ちこぼれることなく学んでいけると感じました。

弘瀬委員が心配なされているように、電子黒板の光の調整については、タブレットの活

用ルールの中にありますが、時々目を休めることが必要です。今では、授業中、必要な場面でタブレットを使っているようなので、目の負担は軽減されていると思います。

余談ですが、前の時間に音楽の授業を見ましたら、手話を使って歌っていました。小さい頃から手話に親しむのはすばらしいと思います。

次に、地域力を活かした学校づくりについて、道塚小学校の授業を参観しました。

3年生はイベントキャラクターを提案しようの授業で、イベントの紹介やみんなで考えたキャラクターの投票をしていました。道塚祭り、マリーゴールド祭りなど、より興味深く関われることでしょう。

4年生は、段ボールのプロから学ぼうという授業で、事前に工場に行ったことで、講師と触れ合い、活気ある授業になっていました。防災ベッドなど、災害の際に参考になる話も聞けました。蒲田駅の運転士、車掌の方々の話からは、スライドを使って様々なことを学びました。

5年生は、下町ボブスレーのプロジェクトの方々の授業で、今は3台目を作成中で、常にチャレンジしている話など、皆、集中して授業を受けていました。

ゲストティーチャーによる授業は、子どもたちにとって興味、関心が高く楽しいものです。そして、地域を知ることによって自分の住んでいるまちをもっと好きになってほしいと思います。

○区長

ありがとうございました。

それでは、深澤委員お願いいたします。

○深澤委員

現代社会において、ICTは情報の検索や発信のために欠かせない大変重要なツールですが、子どもたちにとってはICTをうまく活用することで、従来にはなかった新しい学びを得ることができ、またこれからの社会を生きていく上で役立つものであります。

新型コロナウイルス感染症の拡大の中でも、子どもたちが学びを継続するために、当初の予定を前倒しして、タブレットが全校配置となりました。これにより、ICTの利用率を高めることができましたが、導入後のICTの活用について、しっかりと時間をかけて準備する余裕がなかったことは否めません。しかし、現在大田区では、様々な教科の授業の中で、積極的にICTを活用していると思います。

先日、研究発表会が行われた萩中小学校では、各学年とも理科の授業でタブレットをうまく活用していました。特に、実験の予測の場面では、スクールタクトを活用して互いの考えを視覚化し、グループ、もしくはクラスで共有することで自分の意見を発表し、友達の考えや意見を聞いて、さらに予測を書き足したり、書き直したりすることでバランスよく思考力、判断力、表現力を養う授業が行われていました。

区長とご一緒した小池小学校では、基本操作、学びポケット、情報モラルのそれぞれについて年間計画が立てられていました。大変印象的だったのは、5年生の社会で、工業について調べたことをまとめる授業です。今までの社会の授業では、教科書やプリントで工業地帯の名前を確認して、それぞれの工業地帯の特徴について学んでいくという座学がポ

ピューラーであったと思います。しかし、この学校では、生徒がそれぞれ自由に友達と協力し合いながら課題についての調べ学習をしていました。

生徒に話を聞いたところ、教科書やタブレットを使って自分で工業地帯の名前や、そこで何が作られているかを調べていると言っていました。まさに、子どもたちが主体的に学んでいる様子でした。

この授業を見たとき、これからの子どもたちの学びが明確に変わっていくことを感じました。ICTは、様々な利用が可能であるために、利用方法いかんによって、子どもたちの興味や意欲、理解力を飛躍的に伸ばすことができると思いますが、同時に学校がICTへの取組に消極的な場合にはかなり差が出てきてしまうのではないかと思います。

授業におけるICTの活用方法、子どもたちの取組方等、ICTをうまく使いこなすためには、先生方の研鑽や研修が不可欠です。

教育委員会としては、ICTの効果的な利用についての情報を研究、収集し、大田区内の学校全校で共有していけるようサポートを積極的にしていくべきであると考えます。

小池小学校の後、区長に同行した道塚小学校では、地域の方が多数授業に参加してくださっていました。中でも私が興味を抱いたのは、熊本地震の際、被災地に段ボールで作られたベッドや間仕切りを送ったという大田区内の段ボール会社の方のお話です。

段ボールを組み立てる際のポイントは、四方にしっかり杭があることで、そうすれば天面への荷重は四方で支えられ、かなりの荷重に耐えられるということでした。生徒たちは、既に授業の中で段ボールを使って作品を作った経験があるので、興味深げに耳を傾けていました。

大田区では、令和7年度から文部科学省教育課程特例校として、大田未来づくりの指定を目指しています。ものづくりは人間が文明を発展させた原点であり、文明がさらなる進歩のために欠かせませんが、子どもたちが学ぶにあたって、当該分野の知識、経験等が必要であるため、地域の方々の協力が不可欠です。

道塚小学校では、学校と地域の方々が共に教育を支えている様子がうかがえ、まさに大田区が進めているコミュニティ・スクール構想に合致するものであると考えました。

ところで、令和3年度市町村教育委員会協議会に参加した際、令和の日本型教育における子どもたちの学びの在り方についてというテーマで、6人ほどの教育委員で意見交換をいたしました。

その中で、阪神・淡路大震災を経験した教育委員から、大震災のときに学校が避難所となり、かつ復興の拠点となったことや、現在、過疎化した地域において、学校は子どもたちが6年間通うだけの場所ではなく、地域が風化していくのを守ってくれる存在であるという話がありました。

また、学校は住民が見守りながらつくり上げていくものであるという発言も心に強く残っております。

被災を経験された教育委員の言葉には、大変重みがあり、学校の存在意義について考える契機となりましたし、それがまたあるべき姿だと思います。

学校は、子どもが学ぶだけの場ではなく、地域の方と協力しながらつくり上げていくもので、子どもの生活を豊かにしますが、地域の活性化に還元していくものでもあります。学校と地域との人的な交流は積極的に行われるべきであると考えます。

総じて、大田区内の学校はユニークで、個性豊かです。それぞれの学校のよい点を活かして、またお互いによりよい点を共有し合いながら進めていただきたいと思います。

○区長

ありがとうございました。

それでは、引き続いて、北内委員お願いいたします。

○北内委員

ICTを活用した「主体的・対話的な深い学び」の視点による授業改善について、大田区教育ICT化推進計画をさらに進めていただきたいと思います。

小池小学校においては、一斉授業、協働授業、個別学習、反転授業を支援できる授業支援クラウドであるスクールタクトを活用した双方向型授業を実践されていました。

それだけでなく、ビデオ、フォーム、ジャムボード、デジタル教科書、ウェブ、スライド、MESHなど、ICTを適材適所で活用し、児童も違和感なく取り組んでいました。児童一人一人が主体的かつ対話的に学んでいると実感しました。

また、ICTの活用を通して、児童の論理的思考が進んでいると感じました。ある教室の壁に季節の「秋」から連想する事柄を線分で結んだネットワーク図が貼られていました。これは、情報学のネットワーク理論と呼ばれる分野で、事象を論理的に捉え、モデルを構築する手法として、実社会で活用されています。数学のグラフ理論、物理学の統計力学、コンピューターサイエンスのデータ分析などとも密接な関係にあります。

初等教育の段階で、物事を論理的に考える思考は、将来においてもきっと役立つと感じました。校長先生をはじめ、教職員の指導力に感心しました。

大田区教育ICT化推進計画を進めていただき、個別最適な学びと協働的な学びを更に進化させていただくことをお願いします。

また、小池小学校のような好例を他校にもぜひ共有していただきたいと思います。令和2年度に小学校児童と中学校生徒にICT端末を貸与した当時からお願ひしていた、授業等の事例共有とクラウドの活用が着実に実現しつつあり、感謝申し上げます。教職員のICTを活用しての指導力の向上と、教育データの利活用を推進していただき、授業等の事例の収集及び教員間における事例の共有を通して、さらなる授業改善をお願いします。

また、私はPTA・PTOの保護者さんたちと懇談することが多いのですが、区の教育ICT化推進に関してはお礼の言葉をよくいただきます。これも、ひとえに現場の校長先生をはじめ、教職員の弛まぬ努力と、教育委員会と区職員の皆様のご尽力の賜物と感謝しております。

言うまでもありませんが、人として生きていく上で大切な誠実さや感謝の気持ちなど、これまで区が推進してきた総合的な人間力の育成が疎かになることがないようにお願いします。

また、不登校や病気療養等により特別な支援が必要な児童・生徒に対するきめ細かな支援もどうぞよろしくお願いします。

次に、地域力を活かした学校づくりとしてのコミュニティ・スクールについて、述べさせていただきます。

道塚小学校においては、コミュニティ・スクールを通して段ボールや下町ボブスレーなどの地域のものづくり企業、鉄道会社、カムカム新蒲田などの区施設と連携し、授業に地域を活用し、また、地域社会に開かれた教育課程を実施されています。

地域で子どもたちを育てるということを実践され、子どもたちにとっては、住んでいる地域をより深く知ることができるよい取組だと思いました。

また、地震などの災害時においても、子どもたちが地域の方々を知っていることで、子どもたちの安全・安心につながると思いました。

コミュニティ・スクールの取り組み方は、各学校、地域で異なってくると思いますが、地域と連携して教育活動を実践し、地域で子どもたちを育てるという大きな方向性には変わりありません。さらに、区には古くから自治会・町会という地域で子どもたちを育てるための土壌があり、まちづくりのキーワードは「地域力」です。このような背景から、コミュニティ・スクールを更に進めていただきたいと思います。

ここではコミュニティ・スクールについて、部活動の地域移行という観点から意見を述べさせていただきます。

運動部活動の地域移行に関する検討会議において、「運動部活動の地域移行に関する検討会議提言」が取りまとめられ、令和4年6月6日に、友添座長（日本学校体育研究連合会会長）から室伏スポーツ庁長官に手交されました。

この検討会議は、「運動部活動の地域移行に関する検討会議設置要綱」の趣旨として、「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革について」において、「令和5年度以降、休日の部活動の段階的な地域移行を図るとともに、休日の部活動の指導を望まない教師が休日の部活動に従事しないこととする。」とされていることなどを踏まえ、運動部活動の地域への移行を着実に実施するとともに、地域におけるスポーツ環境を整備し、子どもたちがそれぞれに適した環境でスポーツに親しめる社会を構築することを目的として、運動部活動の地域における受け皿の整備方策等について検討するため、有識者による検討会議を設置するとされています。

区では、現在、区立中学校全28校に31名の部活動指導員を配置しており、今後、休日の運動部活動の地域移行に向け、関係部局と連携し、検討していただけていると思っています。

このような背景の下、現在、コミュニティ・スクールモデル事業で進めている大森第二中学校と大森第三中学校の事例が参考になると思います。

大森第二中学校では部活動支援としてハンドメイド部の着つけ作業を地域の方々の力を借りて、普段できないことを体験できる機会をつくってくださりました。

大森第三中学校では、コミュニティ部活（料理部）を創設し、地域と連携してクラブ活動を推進していただいています。

運動部活動に関しても、地域の人材やリソースを活用して、各学校・地域に適した方法で、地域と連携できるように検討いただきたく存じます。

コミュニティ・スクールに関しては、PTA・PTOでも非常に関心の高い話題の一つですので、引き続き丁寧な説明をお願いします。

○区長

ありがとうございました。

それでは、最後に、小黒教育長お願いいたします。

○小黒教育長

それでは、本日のテーマは、子どもたちの新しい学びの推進と、地域力を活かした学校づくりということですので、私も先日の小池小学校と道塚小学校の学校視察を基にお話をさせていただきます。

現在、子どもたちの新しい学びという点では、一人1台配備されたタブレットをいかに有効に活用して、新しい学びを実践していくかということが最も大事だと思っています。

先日視察した小池小学校は、全校的にタブレットの活用を図っているという点では、本区で最も積極的な学校の一つです。小池小学校のタブレットを活用した授業の良さというのは、子どもたちがとにかく積極的に友達に働きかけて動いているという点であると思います。

そこに子どもたちは、学ぶ楽しさを十分に感じているので、そういう様子があるかと思っています。話を聞いて理解するという授業から、課題に対して友達と一緒に自ら取り組んでいるという点では、非常に印象的でした。

小池小学校では、広く開かれた学習空間、それを活かした課題別のグループ活動がほとんどの学級で行われていたと思います。タブレットは、情報収集の道具であったり、意見交換の道具であったり、表現の道具であったり、その有効性が学習の中で十分に発揮されていたと思います。

タブレットを活用した、いわゆる課題解決型の授業はどの学校、学級でも行われています。

今、個別に最適な学習をといるときに、学習のつまずきに即した、いわゆるドリル型の学習、そういうのも一つあるかと思っています。黙々とタブレットに向かって勉強しているということですが、一人1台のタブレットの良さというのは、それだけではないかと思っています。

その有効性が活かされていたかなと思います。友達と意見を出し合ったり、新しいことを発見したり、新たな方法を見出したりして、問題が解けるという過程の中に、または授業時間の中に学習の喜び、学習を進めていく力が身についているのかなと思いました。

その意味で、子どもたちがタブレットを使って、積極的な情報収集、意見交流、意見発表、表現の威力を発揮する、そのことが十分にうかがえたと思っています。

教育委員会では、先ほどお話に出ましたけれども、ICT教育支援員を配置して、各学校にアドバイスしたり、指導の事例を各学校に提供したりしています。インターネット上の「おおたICT教育センター」に様々な実践例が入っておりますので、これからそれを積極的に広報していきたいと思っています。

ただ、先ほど、弘瀬委員からもお話がありましたように、健康上の課題であるとか、様々なものをこれから考えていく必要があると思います。いずれにしても、教育のバランス、そういうことをしっかり取りながら推進していければと思います。

次に、道塚小学校のSTEAM教育について、地域の方々、それから組織を最大限に活用した教育活動として、やはりこれも地域力を生かした教育という点では、区内でも最も進んでいる学校の一つであると思っています。

当日は、下町ボブスレーについて社長様が説明しているときに、区長が教室に入って、その際に社長様が区長に挨拶して、子どもたちが嬉しそうに顔を輝かせていたのが、大変印象的でした。

私は、子どもたちが社会や地域につながっていくことがとても大切であると思っています。自分にとっての地域、社会があること、これがやはりアイデンティティーを確立していく。社会人として自立していくために、とても大切なことであると思っています。

ソーシャルキャピタルや社会関係資本など、そういう言葉でも言われますけれども、人とのきずなが結びにくくなっている現在の状況を考えると、このような学習がとても大事であると思っています。

自分の能力、それから可能性をどう発揮していけばよいのかということ考えたときに、人や社会とのつながりというのは欠かせないものだと思います。

その意味で、多くの地域や社会の人から話を聞いて、生き方を学ぶ、生き方を考えていくということが大切であると思いました。その中で、自分たちの可能性、自分の方向性を見出してほしいと思っています。

今回は新しい学びという観点から、二つの学校の視察について述べさせていただきましたが、二つの学校の実践は、教育委員会が目指す教育施策の具現化ということが、実際の教育活動として図られています。それが他の学校の指針になるのではないかと考えています。

今、新しい学びというと、教師伴走型といった、一緒に子どもと共に学んでいくということが言われています。より子どもたちの主体性というのを重視し推進していくという意味であるかと思っています。

しかし、私は教育委員会や教師が羅針盤のように、方向を指し示してあげる、そのような働きも大変重要であると思います。海図なき航海に耐えられるように、将来社会を予測することは非常に難しいことですが、子どもたちの現在はどういうところにあるのか、進むべき方向について、やはり教育者がしっかりと見定めながら、ともに歩いていく、助言していくことが大切であり、そこに新たな教師の専門性があると思います。

そういう意味では、教育委員会も教育の羅針盤として、その役割が十分に果たせるように、次年度策定する新しい教育ビジョン、その方向性、施策について十分に論を重ねて取り組んでいきたい。その中で新しい学び、地域力を活かした学びを重点としていきたいと考えております。

○区長

ありがとうございました。それぞれの委員の方からお話を聞きました。

特に小池小学校と道塚小学校、私も一緒にお供させていただきました。教育の現場を久しぶりに見ることができ、大変嬉しく、良い時間を過ごさせていただいたなと思っています。

そういう中で、三留教育長職務代理者からは、特にICT教育センターをしっかりとやってほしいという話をいただきました。

また、コミュニティ、学校地域社会、この連携が非常に大事だと全委員の方からお話をいただいたところでございます。

また、高橋委員からは、特に外国人との教育でICTを使っていたということがあり、大田区は国際都市を謳っているということもあり、私も現場を見て、子どもたちは英語もしっかりしているし、我々大人よりも度胸があるのではないかという、そんな印象を受けましたけれども、これからはこういう教育も大事なかなというふうに思っています。

それから、先生方の格差が出てしまうのではないかというご心配がございました。これは一つの大きな課題だと思っています。良いご指摘をいただいたなと思います。

また、弘瀬委員からは、家庭でもICTをしっかりと学べるような環境をというお話がございました。

特に医師の立場から、ICTが健康に与える影響をご指摘いただきまして、そうだなという気持ちで、私も聞いておりました。ありがとうございます。

また、深澤委員からは、阪神・淡路大震災時の学校の事例を出していただき、地域コミュニティの核になるということで、我々行政側からといたしましては、一番大事なのやはり震災のときだと思えます。

ほとんどの小中学校に区民が避難していくということでございますので、学校がそういうコミュニティの中核の場所になっていきます。ですから、地震のときだけではなくて、平素からそういう学校を拠点としたコミュニティづくりが非常に大事だと思います。

そういった意味では、学校と家庭と地域とが一緒になって連携を取っていくということが非常に大事だと、ご指摘いただいたとおりだと思っています。

北内委員からは、ICTの更なる向上や、コミュニティ・スクールにおける部活動の地域移行という観点からご指摘をいただきました。地域の方もたくさん入れてやっていこうという、大きな改革の一つになっていると思っています。

これに基づき、教育委員会でもしっかり取り組んでいくと思いますが、我々としても地域の方と触れ合っていますので、そのような形のものをつくっていければ良いと思っています。

また、小黒教育長からは全体的な評価をいただき、ありがとうございます。

時間がちょうど5時までということでございますので、いろいろご指摘をいただきまして、十分にこれをまとめさせていただいて、情報の共有をさらに皆様と一緒に図ってまいりたいと思います。

どうか、今後ともよろしくお願い申し上げて、終わらせていただきたいと思います。

最後に、事務局から閉会の挨拶をお願いいたします。

○総務部長

本日は、様々なご意見を頂戴し、誠にありがとうございました。

今回、一緒に現場を見させていただきまして、本当に言葉だけで通じるような部分があったと思います。ぜひ、これからの教育に活かしていきたいと思っています。そして、この総合教育会議が子どもたちのために、さらなる発展につながるような形で進めさせていただきたいと思っています。

本日は、どうもありがとうございました。

(午後5時00分閉会)